HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	開拓使の画工牧野数江について
Author(s)	今村, 信隆
Citation	北大植物園研究紀要, 3, 57-62
Issue Date	2003-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32823
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_p57-62.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

開拓使の画工 牧野数江について

今村 信隆[i]

はじめに

ブラキストン標本に基づいて制作された一連の博物画（北海道大学植物園・博物館[1]所蔵）、その制作に携わった画工として名前が挙がっているのは、現在のところ、若林友恭、沼田正之、杉浦高融、牧野数江の四人である。ただ、荷舟の画号で知られる沼田正之についてはある程度の事実が判明している[2]ものの、残る三人の画業に関しては、多くのことが明らかになっているとは言い難い。

そこで本稿では、これらの博物画の制作に参加した画工の一人牧野数江に注目し、北海道立文書館並びに北海道大学附属図書館北方資料室に所蔵されている文献資料を中心に調査して、可能な限り彼の足跡を追いたい。

1.戊辰戦争に参加する

牧野数江が生まれたのは、天保２（1831）年２月のことである[3]。しかし、現在のところ、彼がいつ、どこで、どのようにして画技を習得したのかという疑問に答えてくれる資料は見つかっていない。彼の名前を確認することができる最初の資料は、意外なことに、戊辰戦争関係の文献である。

まず、新聞『かなよみ』（明治10年７月26日付）には、画工牧野数江が戊辰戦争の際に大鳥圭介の参謀として活躍したと記されている。大鳥圭介自身もまた、回想録『幕末実戦記』において、「牧野主計（かずえ）」なる人名を挙げ、この人物から馬を借りたことを述懐している[4]。この「主計」を件の牧野数江と考えることに、無理はないだろう。

また、田中彰によれば、ハーバード大学附属燕京研究所の中国及日本関係図書館に所蔵されている『蝦夷事情乗風日誌』という資料にも、この戦争に参加した人物として「牧埜主計」の名前が挙げられているという[5]。さらに、元新撰組隊士島田魁が作成した『閣僚・諸隊幹部名簿』にも、牧野数江と思われる人物名が記載されている[6]。これらの人名も、後に開拓使の画工となる牧野数江のことを指していると思われる。

周知の通り、大鳥圭介らが率いる反政府軍は明治２（1869）年、函館で降伏する。だが、牧野がこの一連の戦争にどの時点まで参加していたのかはわからない。この時、北海道に渡っていたかどうかについても、定かではない。また、この戦争の後、賊軍に加担してしまった牧野がどこでどのような生活を送っていたのかという点についても不明である。

2.開拓使に雇われる

その後、明治７年５月23日、牧野は開拓使東京出張所物産課に雇われている[7]。彼が雇われることになった詳しい経緯については判然としていない。ただ、大鳥圭介や荒井郁之助をはじめとして、戊辰戦争で明治政府に反抗した人々の多くが、その後開拓使に雇われているのだから、この経歴はさほど奇異なものではないと言えよう。また、いたずらに想像をたくましくすることは避けるべきだけれど、当時、物産課の事務管理を任されていた大鳥圭介が牧野の雇用に際し何らかの斡旋をしたという可能性もあるのではないか。しかし、牧野の配属先となった物産課の『日記』[8]には、彼が雇われたという事実が簡単に述べられているだけである。

さて、この『日記』の冒頭には、人員名簿が付されており、そこに「絵図写字」係として牧野の名前が挙がっている。このことから、彼がかなり早い段階から絵図に携わる仕事をしていたことがわかる。また、この『日記』には、後年ブラキストンの鳥類模写事業に参加する若林友恭に関する記述も散見される。例えば若林から牧野へ給料が手渡されたという記述も何度か見られ、鳥類模写事業以前に、二人に面識があったことがうかがえる。

---

[i] 北海道大学大学院文学研究科思想文化学専攻

この時期に牧野が携わっていた仕事として確認できているものは、北海道「各所見取図」の作成である。明治7年7月、牧野は大鳥圭介に随行して北海道へ出張する[9]。この出張を終えて帰任した後、彼は「見取図」の制作にとりかかったようである。次の文章は、当時北海道の地質調査に携わっていたライマンが新しい製図工を求めた際、誰がライマンの補助手となるのかを選定している文書からの抜粋である。

「御雇牧野数江

右は本年北海道江出張仕各所見取圖未タ皆出来ニハ不相成候得共不日皆出来候義ニ付

然る上は一時ライマン氏補助手被仰付候而可然奉存候

明治七年十二月十二日　　物産課」[10]

この「各所見取図」がどのようなものだったのかという点に関しては、原物を確認できていない以上、確言することができない。ただ、同時代に開拓使の周辺で作成された他の「見取図」[11]から推察するに、簡単な実景図のようなものである可能性が高いのではないかと思われる。仮に牧野が描いていたものも実景図であったならば、鳥類画帖制作以前に牧野が北海道の風景を描いていたことになる。ブラキストン標本に基づいて制作された一連の鳥類図の中にも、鳥の背景として風景が描き込まれているものが多数あることを考え合わせるならば、この事実は興味深いのではないか。

3.北海道へ渡る

さて、上述した推挙を受けた牧野は、明治8年1月からライマンの下で製図工として働き始め[12]、さらに、同年2月には札幌在勤を命じられている[13]。

製図工としての牧野もなかなか有能だったようである。彼が短期間のうちに製図工としての技能を身につけたことは、ライマンとマンローの書簡[14]から推察することができる。両者は、それぞれの地図作成のために製図工牧野を奪い合っているのである。例えばマンローは、明治8年5月20日付の書簡の中で、ライマンが牧野を貸してくれないことを調所弘丈に訴えている[15]。また、製図工としての彼の足跡は、ライマンがケプロンに宛てて提出した報文の中にも、確かに記されている[16]。

4.缶詰事業に携わる

明治9年頃、牧野数江は開拓使からの辞令を受け、東京に戻ってきたと思われる[17]。ブラキストン鳥類標本の模写事業に携わり始めるのは、この頃のことである。ただ、本稿ではこの鳥類標本模写事業そのものについてはふれず、ほぼ同じ時期に彼が関与していたと思われる缶詰事業について考えたい。

この頃、開拓使は、北海道の産物を利用した缶詰の製造・販売を試みていた。これらの缶詰の中には、鮭、鱒、牡蠣といった海産物や、鹿肉、あるいは七重の農業試験場で生産された果物なども含まれていたようである（ただし、全てが販売にまでこぎつけたわけではない）。

この一連の缶詰事業に際して、当時牧野数江が勤務していた仮博物場は、缶詰に貼り付けるための化装紙制作に関わろうとしている。まず明治10年3月、勧業課仮博物場は化装紙の制作に名乗りを挙げ、当時札幌にあった石版用器械を取り寄せようとする[18]。東京の書記官へ提出されたこの文章の中で、仮博物場が画工の存在を宣伝している点は重要であろう。少なくとも当初の段階では、仮博物場の画工たちが化装紙の制作に何らかのかたちで携わることが企図されていたのである。さらに、この時仮博物場が所望した石版用器械が、実際に札幌から東京へ差し回されていることも確認することができた[19]。

ただ、この石版用器械がどのように使用されたのかについては明らかになっていない。本格的な化装紙の製造は、大蔵省紙幣局（後に印刷局）に依頼されているからである。石版用機械は、実際には使用されず、埃をかぶっていたのかもしれないし、何か他の目的に使用されたのかもしれない。あるいは、紙幣局で印刷された化装紙の下絵のようなものを刷っていたのかもしれない。

しかし、いずれにせよ、大蔵省紙幣局と開拓使勧業課の間で交渉にあたっていたのは、勧業課仮博物場であった。そしてその際、両者の間を頻繁に行き来していた画工が、他ならぬ牧野数江なのである[20]。

彼が演じた役割は実に多様であった。例えば次の文章に見られるように、紙幣局に出張して単に印刷にかかる諸経費の見積もりを尋ねてくるだけのこともあった。

「鮭管詰貼用張札調整致し度ニ付其御局ニ於而御印刷相成候ハヽ何程ノ費用ニテ出来候哉因而牧野数江差出候条委曲同人より御承知諸費用御申越有之度此段及御照会候也

十年十一月二十日　開拓使勧業課

紙幣局御中」[21]

また、印刷の「仕立振」にも口を挟んだようである。

「課長　　物産課

一　牡蠣管詰化装紙千弐百枚

右至急調整方致御依頼候尤当使牧野数江御局整理部へ直ニ差出仕立振等之義引合置候間御了承相成度候也

開拓使勧業課

十一年六月十八日　　紙幣局御中」[22]

さらに次に引用する文章では、勧業課側が紙幣局に対して、印刷の「模様等」を牧野と相談するように求めてもいる。

「鮭管詰化装紙壱磅入之分五千枚弐磅入之分壱萬五千枚至急御印刷有之度代価償之義は御申越次第可及償還候此段及御依頼候也

開拓使勧業課

十年十二月四日　　紙幣局御中

追伸模様等之義は牧野数江を以御局整理部へ委詳及御依頼置候ニ付此段申添候也」[23]

牧野数江が、実際にどの程度まで意匠の決定に携わっていたのか、その度合いを測ることは難しい。しかし、少なくとも彼が化装紙のデザインに口を出せる立場にあったことだけは確かである。もちろん、下絵のデザインそのものを牧野が描いていたという可能性もあるだろう。

これらの缶詰のうち、鹿・鮭に関しては、現在、北大植物園・博物館に所蔵されている。

5.開拓使を離れる

鳥類標本模写事業が完了した後も、牧野は開拓使にとどまり、仮博物場で仕事を続けている。例えば仮博物場の『文移録』[24]には、牧野を除服出仕させようとする記述などが見受けられる。

しかし、明治13年6月19日、牧野は「仮博物場専務外」を通告され[25]、明治14年5月21日には再び札幌在勤を命じられる[26]。この転勤辞令は、開拓使東京出張所自体の廃止に伴うものであった。

再び訪れた札幌で彼がどのような仕事に携わっていたのかは不明である。ただ、『廃使ノ際開拓使本庁職員録』[27]に「牧野数衛」の名前が記載されていることから、開拓使が廃止されるまで、彼が札幌で勤務していたことがわかるのみである。その後、北海道開拓使は廃止され、その業務は農商務省等に引き継がれてゆくわけだが、牧野がその残務処理を行う「開拓使残務取扱所」にとどまっていたことも確認されている。その残務取扱所から解雇を通告され、牧野が開拓使から完全に離れることになるのは、明治15年3月18日のことである[28]。この時、牧野数江は既に五十代になっていた。

さいごに

さて、以上の調査から、牧野数江が携わっていた仕事の一端が明らかになった。彼は、鳥類模写事業以外にも、北海道「各所見取図」の制作、ライマンらの下での製図業務、缶詰ラベルの印刷事業など、非常に幅広く活躍していたのである。また、鳥類模写事業以前の牧野が少なくとも二度（一度目は大鳥圭介の随行員として、二度目はライマンの製図工として）北海道を訪れていることが明らかになった。

ただ、開拓使を離れた後の牧野の足跡については、残念ながら全くわかっていない。また、彼が画技を習得するにいたった事情についても不明である。彼の経歴がさらに詳しくわかれば、画風を推察する際の手がかりとなりうるかもしれないだけに、なんとも残念である。牧野数江の事跡については、今後、さらに調査の余地があるだろう。

なお、調査・執筆にあたり、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館加藤克先生、並びに北海道大学大学院文学研究科田島達也先生から、多大なるご指導・ご指摘をたまわりました。記して謝意を表します。また、北海道立文書館・北海道大学附属図書館北方資料室の方々には、資料の閲覧・調査に際し便宜をはかっていただきましたことを深く感謝いたします。

---

1 正式名称は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館。以下北大植物園・博物館と略記する。

2 沼田については、例えば、服部徳次郎『愛知画家名鑑』（1997年、愛知画家顕頌会）に次のような記載がある。「尾張藩士沼田月斎の孫、名古屋水筒先町に生まる。幼時より画を祖父に学び、花鳥にもっとも長ず。東京に出て画を業とし、旧皇居の障壁画を描く。なお『荷船花鳥画譜』の著書がある。」詳しくは本書田島氏論文を参照。

3『明治七年官員明細表』（北海道立文書館所蔵簿書、簿書番号1177、北海道立文書館所蔵簿書については以下簿書と略記する）、『履歴短冊明治十年』（簿書1958）等による。

4 大鳥圭介『幕末実践史』（新人物往来社版、p68）、「本日雨後にて山路泥深く行歩難渋なり（中略）予は牧野主計の馬を借りて乗りたれば歩行の労はなけれども（後略）」。

5 田中彰『北海道と明治維新』北海道大学図書刊行会、2000、p223。この資料は明治元（1868）年3月11日から翌明治2（1867）年9月11日までの日誌で、後に加筆された部分もある。筆者は確定されていないが、この戦争に参加した人物であることは間違いない。

6 この名簿は『箱館戦争史料集』(新人物往来社、1996年)に採録されている。ただ、問題の人名は、翻刻では「牧野主斗」となっている。

7『任解文移録』（簿書1520の92）あるいは、『日記（物産課人員並ニ宿直付）』5月23日付（簿書0947）

8 注7参照。以下、『日記』と略記する。

9『日記（物産課人員並ニ宿直付）』、7月10日付「本日大鳥圭介殿始メ久保田良造町田實則牧野数江北海道巡廻御用として玄武艦ニ而北海道江出発」。

10『諸伺留』（北海道立文書館、簿書1528の148）。

11 実景を描いたものとしては、例えば、＜クリル諸島海線見取図＞（福士成豊・甘利後知筆、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵、資料番号「軸物164」）、＜樺太南岸見取図＞（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵、資料番号「図類1488-1～3、開拓使編輯課印あり）などが現存している。

12『進退録壱番』（北海道立文書館、簿書1522の7）1875年1月14日
「物産課　雇　窪田将房　ライマン氏製圖補助申付候事
同　　同　牧野数江　當分ライマン　以下前同文
明治八年一月十四日　　開拓使」

13『進退録壱番』（簿書1522の73）。

14 北海道大学附属図書館北方資料室所蔵『開拓使外国人関係書簡』(2696－30、3119－32　同資料については以下『外国人関係書簡』と略記する)。

15『外国人関係書簡』（3119－032、1875年5月20日付'I have applied to Mr. Lyman the services of Mr. Makino to assist me in finishing my maps for the Kaitakushi. Mr. Lyman, however, cannot let me have Mr. Makino's assistance at present, as he still some works for him to do'。

16「寫眞ノ為白布ニ墨黒ク圖ヲ寫シタルハ牧野數江氏ナリ」（『開拓使顧問ホラシ・ケプロン報文Ⅱ』、p1165）。ちなみに、この時に制作された地質図は北海道大学附属図書館北方資料室で閲覧することができるが、そこに製図工牧野の名前は記載されていない。

17『開拓使公文録』（明治8年、東京出張所、簿書5817の132）には、牧野を東京での勤務に着かせようとする伺いが見られる（明治9年8月9日付）。しかし、『文移録』（簿書1927の70）の記述によれば、牧野は明治9年7月の段

階で既にブラキストン標本の模写事業に携わっていたことが知られるため、上述の伺いの年次ないし日付に誤りがあるのではないかと考えられる。この点については今後の課題としたい。

18 『文移録』(簿書 2985 の 44)、「(前略) 果実ノ罐漬等追々盛大ニ可相成ニ付テハ標目紙ノ義多数ヲ要スル勿論ニ付之レヲ商人ニ依託シ候テハ御不益不少ト存候間兼而札幌ニ御備相成候石版大小弐組ノ内小之分別紙ノ通リ當地へ御取寄セ相成標目紙其他右石版ニ相應スルノ諸絵図等摺立候へハ百事便利ニ可有之存候尤別紙品目ノ外不足ノ品モ有之候トモ聊之品ニ付御新調相成候ニモ為指御入費ニモ有之間敷且摺立方ノ義ニ至テハ御用掛野口源之助兼而相心得居其余ハ活版掛及御雇画工等ニテ事足リ可申ト存候間何卒札幌へ御掛合ノ上別紙ノ通リ急便ニ御取寄セ相成度因テ御掛合案相添此段相伺候也　十年三月廿一日」。

19 『東京文移録』(簿書 1950 の 217)、(札幌の調所大書記官から東京書記官へ)「山海之肉類燻製或は缶詰等ニ貼用之標目紙従前彫刻社江御申付相成居候処価之不廉而已ならす不便利ニ付當地備石版壱組其地御備相成度旨縷々御申越之趣了承當地ニ而も格別差支無之ニ付今便別記之通り及御回致候条御査入有之候也　明治十年五月五日」。

20 『化装紙書類』(簿書 2379)、『化装紙書類』(簿書 3004)。

21 『化装紙書類』(簿書 2379)。

22 『化装紙書類』(簿書 3004 の 23)。

23 『化装紙書類』(簿書 2379)。

24 『文移録』(簿書 4474 の 5)、明治 13 年 2 月 24 日付。

25 『辞令録』(簿書 4449 の 194)。

26 『使員進退録』(簿書 5097)。

27 『廃使ノ際開拓使本庁職員録』(簿書 5172)。

28 『進退録・明治十五年』(簿書 7233)。



北大植物園・博物館蔵　鹿缶詰レプリカ

（標本番号 39564）



北大植物園・博物館蔵　鮭缶詰レプリカ

（標本番号 39565）



